

えるのも恐ろしく、相談の結果、新京の工場を頼りに出発することに決まりました。

危険を犯して、主人が連絡を取りに出かけました。ひとまず、避難民と行動をとともにさせて頂くことを決めて戻ってきました。

避難列車を待つ間、小学校に集合することになりました。

それぞれの教室には、大勢の人々が何列もきちんと仰向けになって休んでおられます。「行儀よく休んでおられる」とつぶやいたところ「皆、死人ですよ」と言われて驚き、牡丹江で出会った開拓団の方たちの姿が浮かびました。いつあんな姿になるのかと、恐ろしくなり、子どもたちには見せないように気を遣いました。

▽新京へ

いよいよ出発の合図がありました。平素は石炭を運ぶ無蓋車（むがいしゃ）がほとんどです。順番に並んで乗るので、注文や文句はつけられません。私たちの貨車は、輸送指揮官と一緒に屋根のある箱型の貨車で安心しました。

輸送指揮官から「密閉して全員窒息死しないように、扉は五分くらい開けておくこと。また、銃身を突っ込まれて乱射されないように」と細かい注意がありました。みんな指揮官の指示に従うことを誓いました。ここもまた、ぎゅーぎゅー詰めで、用便の始末をどうしたかも覚えていません。

途中、何度も何度も匪賊（ひぞく）の襲撃があり、その度に列車が停められ、指揮官の言った意味がよく分かりました。銃身を突っ込もうとし

ます。「扉は五分以上開けないように」と言った意味もよく分かりました。何日乗ったのか覚えていません。銃声が絶え間なく聞こえています。やっと新京に到着です。

無蓋車の男性たちは縛られ、婦人たちは目の前で乱暴されたのだと、新京に着いてから知らされ、被害のひどさを見せつけられました。

十一月の中ごろはもう寒さが厳しく、工場には寝泊まり出来ません。またまた工場近くの料理店の中国人の好意で、二階を提供してもらいました。無料です。電気、水道も使えます。手洗いが大変でした。用便はすぐに凍り、次々と柱のように延びていきます。ハンマーで手の届く限り打ち砕きますが、大人数なので毎日の仕事でした。

私たち六人は、奥の四畳半一間、